

小千谷市北東部の地理学的考察

川 中 豊 子

第一章 調査地及び周辺地域の概観

第二章 小千谷北東部の自然環境

第1節 地形分類

第2節 積雪

第3節 首沢地形

第三章 東山山地の人文環境

第1節 東山の集落

第2節 東山の農業

第3節 東山における農業問題

1. 兼業傾向

a. センサスからみた兼業傾向

b. 出稼

c. 錦鯉の養殖

2. 東山の収入源の多様性

3. 農家の流出

a. 戦後の東山の農家変遷

b. 青少年層の流出傾向

c. 長男および二・三男の就職傾向

d. 挙家離村

第4節 東山の地域分類

第5節 東山の将来

調査地域は、信濃川と魚野川によりはさまれた東山山地の南東端で、信濃川の段丘と山地から成る地域である。

自然環境では、段丘の分類と山地の地質構造とその斜面の方向性、傾斜谷密度の測定など、主に地図作業から東山山地を考察した。また本地域が豪雪地域として有名であることから積雪を特にとり出して考察した。最後にそれらが原因または誘因となっていると思われる小規模な崩壊性地塊

を述べるため、首沢地区を扱った。以上の自然環境を背景として本卒論では、東山山地の農業衰退と兼業傾向に注目した。かつて、種^草原、竹沢村、東竹沢、大田村などと共に錦鯉と鬮牛でしられた二十村郷の一つであり、昭和29年古志郡から小千谷市に一部を除き合併されたものである。本地域の農業は冬期間の豪雪により耕作不能のため水田単作地帯となっている。傾斜が急な山地にもかかわらず河谷から、山頂近くまで溜池によって灌漑された棚田によって行われている。しかし耕作面積は一戸平均6.1反の零細農業であり、自然的障害も大きいことから自給的色彩が強く専業農家は1%にも満たない。米の供出量も年々減少傾向にあり、他に収入源を求めることが重要な問題となっている。現在農業・養鯉・冬期間の出稼ぎから主な現金収入を得ている。近年養鯉への比重が各農家とも高まっているが、どれも東山を支えるまでには到らず、兼業が不安定なこともあって農業が衰退に向っているにもかかわらず、農家戸数、青少年の流出傾向は著しくない。技術をもたない中老年層、また青少年層も高校進学率が10~15%の現在、都会にでても現在以上の生活を維持することは困難であることから東山にとどまらざるを得ないのである。また出稼が縁故による酒造商店が多く、養鯉と共に昔から季節的に農業と組合わさって成立していることも本地域の特色である。今後交通機関の発達に伴い通勤兼業が可能な労働市場が成立すれば、現状の変わる起点となりうるが、あまり期待できない現在、急激な変化は望めない。調査過程において同じ生活基盤をもつ東山でも部落間に相違がみられたので、東山地域を3つに分類した。

多摩丘陵田園都市線沿線の都市化

熊谷恭子

第一章 調査地域の概説

調査地域は、東京西南方に広がる多摩丘陵南東部にある。東京から20~30kmに位置し、横浜市港北区の山内、中里、田奈地区を調査範囲とした。

多摩丘陵は北西から南東に次第に低くなり、最高は海拔200m、東京湾に50~40mの崖で臨んでいる。この丘陵は、普通、原野田—溝口を結ぶ海拔100m線でT₁、T₂面に分けられ、調査地域は南のT₂面に含まれる。細かく開析されて樹枝状の谷がみられる。傾斜は20°前後が最も多く、丘陵の性質をよく表わしている。起伏量は20~40mが多い。丘陵の表層は関東ロームによって覆われている。

以上のような自然環境のもとに昔から人々は住みついていたが、平坦地が少ない東海道本線から